

第 1 章

寛容についての先行研究概観

間 寧

要約：本稿では、寛容の個人および集団レベルでの規定要因についての先行研究を概観した。寛容を規定する個人的要因は権威主義、教育、接触、脅威についてはその効果がかなり一般的に確認されている。しかしながら、それらが寛容に及ぼす効果を強めるあるいは弱める要因については研究の余地が大きい。特に、権威主義が脅威効果に与える影響、状況要因が接触効果や脅威効果に与える影響は、近年特に注目を集めている。

キーワード：政治的寛容、権威主義、教育、接触、脅威、民族的多様性

はじめに

本稿は、寛容の個人および集団レベルでの規定要因についての先行研究を概観したものである。まず第1節で寛容の概念的および操作的定義を確認し、第2節で寛容の個人レベルでの規定要因、第3節で集団レベルでの規定要因についての知見を探り、最後に全体の議論をまとめる。なお、本稿の狙いは主要な要因のみならず、個々の知見が導かれた方法と文脈をも把握することにある。方法と文脈が違えば結論が違ふことは以下で見る事例からも明らかである。

第1節 寛容の概念的および操作的定義

寛容、特に政治的寛容は、賛同しがたい考えや集団に対して我慢すること（Gibson 2007, 410）と概念的に定義される¹。その度合は、自分が最も好まな

い集団 (least-liked group) に対してどの程度の市民的権利を認める意思があるかにより通常測られる²。あえて最も好まない集団を対象とするのは、概念的定義にある「異議の前提」を満たすためである。またそれは、Stouffer (1955) が社会主義者、無神論者、共産主義者からなる非協調者に対する態度を測った寛容指標をより一般化し、改善したものでもある。

ただし、「異議の前提」をあまり厳格に適用すると、実際上の問題が発生する。最も深刻な問題は、最も好まれない集団が多くの場合民主主義的価値を否定する過激派になることである。ネオナチ、クー・クラックス・クラン、他の人種差別主義集団への寛容が、本来の寛容を体現しているのかは疑わしい。第2に、「異議の前提」を明示的に適用すると、母集団の標本枠組を著しく狭める。何らかの集団に異議を表明した人しか調査の対象になり得ないからである。しかしもし集団間に潜在的な対立関係が存在すれば、寛容を測るのに明示的な「異議の前提」は必ずしも必要でない。

寛容の下位分類の中で最も頻繁に研究されているのは、民族に対する寛容(以下民族的寛容と称す)であろう。先進国における民族的寛容の研究では、移民か外国人労働者への寛容が主に取り上げられている (Weldon 2006; Crepaz and Damron 2009; Cote and Erickson 2009)。世論調査の対象者は基本的にすべてが国籍保持者であるため、「異議の前提」に従い、移民や外国人の存在への不快感を示した回答者を選んでその人々の寛容度を測ればよかった。しかし非先進国における民族的寛容とは多くの場合、少数派民族に属する土着の市民に対してのものである。だとすると「異議の前提」を適用することははるかに難しい。そのような状況では、民族的寛容を、「異議の前提」を求めずに外集団(out-group)寛容を測るのが現実的である(たとえば Gibson (2006))。

寛容としばしば並行して論じられるのは偏見と信頼であるが、概念上は以下のように区別される。第1に信頼、厳密には一般的信頼は、集団内(in-group)信頼と外集団信頼から成るが (Uslaner 2002)、寛容は定義上、異議を感じる集団、あるいはより緩く言えば外集団に対する信頼である。その意味で、寛容の対象は、信頼の対象よりも狭い。第2に偏見は、特に否定的民族的偏見という意味で用いられ、特定の集団(に属する個人)に関する誤ったあるいは固定的な一般化と定義される (Allport 1954/1988, 9)。(民族的)寛容は、偏見の有無とは理論的には無関係だが、実際には偏見が強いと寛容性が弱まることが広く見られる。そのため、偏見研究と寛容研究の接合面は広い。これらの相違点と類似点を考慮しつつ、この先行研究概観は、寛容に加えて偏見や信頼についての研究成果で寛容の分析と論理を共有するものにも依拠した。

第2節 個人別決定要因

寛容を決定する個人別要因は、主に4つ、すなわち、権威主義、教育、接触、脅威である。前者の2つは個人に内在あるいは付与されているのに対し、後者の2つは外生的性格が強い。

2. 1 権威主義的性格

権威主義的性格は偏見と非寛容の傾向の強い個人に根ざしている特徴的な性格とされている。Adorno et al. (1950, 971) は偏見の学際的分析により、階層的で虐待的な親子関係の経験が、強者を称え弱者を蔑む権威主義的性格を形成すると論じた。特に他民族への偏見が強い人間は、(1) 自分にとって望ましくない感情の抑制、(2) 自分の直感を信じずに外部の仕業を疑う、(3) 人間関係での形式主義、(4) 権力志向と愛情欠如、(5) 二元主義的頑固さ、などの特徴を持つことが統計分析から明らかになった (Adorno et al. 1950, 468-653)。同様に Stouffer (1955) は、固定観念を持ち、権威主義的かつ協調主義的な育児観を持つ個人は共産主義者や無神論者に対して非寛容であることを見いだした。より一般的には Stenner (2005) が、民族、政治、倫理など多様な対象についての寛容も権威主義的性格に強く規定されること、そしてその影響は社会規範に対する脅威感により強化されることを示した³。権威主義的性格は、政治活動などによる寛容学習効果を弱めることも確認されている (Hinckley 2010)。

2. 2 教育

多くの研究は教育を制御変数として用いている。Stouffer (1955) や Allport (1954/1988) 以来、教育水準が高い人間は寛容であることが確立しているからである。教育は知識と情報を増やし、認識能力を高め、普遍的価値規範を広めることにより民族的偏見を減らすと考えられるが (Coenders and Scheepers 2003, 317; Hagendoorn 1999)、教育が寛容を高める過程を実証的に研究した事例は少ない。また教育の寛容への効果が国ごとに大きく異なると、教育は重要な独立変数となりうる。Coenders and Scheepers (2003) は教育が民族的排外主義を抑える効果は、先進民主主義国よりも新興民主主義国において有意に小さいことを見いだした。その理由は、国民教育の中に自由民主主義的価値を浸透させることに時間がかかるためと論じられている。旧ユーゴスラビアについても、教育の寛容に対する効果はあまり強くないと報告されている (Hodson et al. 1994)。Marquart-Pyatt and Paxton (2007) は、教育をも含めた個人レベルでの寛容規定変数が一般的に西欧よりも東欧で弱いことを示した。彼らはまた、最も好まれない集団リストの中に米国以外では非合法とされる集団が含まれていることが、米国以外での寛容水準を押し下げているかもしれないと論じた。

2. 3 接触

接触仮説は、挨拶程度の接触からより交流的な接触まであらゆる接触が民族集団に対する偏見を減らすという Allport (1954/1988, 261-282) の考えにもつ

ら依拠している⁴。接触効果についての初期の研究には、人種統合的住居プロジェクトの効果分析がある。Wilner et al. (1955) は共同住宅が人種統合的でも人種隔離的でも、白人の黒人に対する意識は両者の住戸の距離が小さいほど好意的になることを見いだした。またによれば、人種統合的居住区と人種隔離的居住区での白人住人は、入居当時には両者の間に黒人に対する意識に大きな違いはなかったが、入居後に対黒人意識が良くなったとの回答が人種統合的居住区では約 6 割だったのに対し、人種隔離的居住区では 3 割以下だった (Deutsch and Collins 1951, 97)。より最近では Persell, Green, and Gurevich (2001) が、共同体間の交流 (socialization) が寛容を有意に高めるのに対し、共同体内の交流が寛容を弱めがちであると報告している⁵。Mutz (2002) はさらに、自分と異なる考えに接するだけでは寛容の形成に結びつかず、接触が相手の論理の認識 (認知作用) か人間的関係構築 (感情作用) をもたらすことが必要であることをサーベイ調査で実証した。ところで非寛容が外集団との接触を少なくすること (逆の因果関係) も考えられるが、Pettigrew and Tropp (2006) の (先行知見を統計的に再分析した) メタ分析によれば、接触の対寛容効果の方が、寛容の対接触効果に遙かに勝っている。

新興民主主義国においても、接触仮説はこれまで実施された数少ない研究結果で支持されている。南アフリカでは、民族間寛容と政治的寛容は民族間接触と脅威感に有意に関係していたが、集団所属意識との関係は認められなかった (Gibson 2006)。直接的接触の他に、団体活動や抗議行動など非正規活動への参加は、これらの民主主義的権利を行使する外集団の行動を理解し、寛容を高める効果をもたらすことも確認されている (Hinckley 2010; Peffley and Rohrschneider 2003)。

2. 4 脅威と競合

個人ではなく社会に対する脅威感、寛容を強く規定する外生的要因である (Gibson and Gouws 2003; Huddy, Feldman et al. 2005)。そのため寛容研究では脅威感と寛容の間の媒介機能に焦点を当てている。実験研究は、脅威感の寛容への影響は個人の先行思考ないし性向に大きく規定されることを明らかにした。Marcus et al. (1995) は寛容を、先行思考と現在情報の相互作用の結果として体系的に説明した。そもそも強い脅威感が内在する人は、そうでない人に比べて非寛容であるものの、その態度決定においては、現在情報に対してより敏感である。そのため、現在情報が安定的な内容である場合、脅威感の強い人と弱い人の間の寛容の差は縮まるというものである。Marcus et al. (2005) はまた、外生的な不安は、態度決定における現在情報への依存を高め、個人的性向への影響を弱めることを示し、外生的な不安は寛容を良くも悪くも変化させる媒介となると論じた。

偽・非実験的研究では Lavine, Lodge, and Freitas (2005) が、脅威感が高まると自分の態度に合致する情報を求めるために見解が固定化するという傾向が、権威主義的な人々の間でより強いことを示した。Davis and Silver (2004) によ

れば米国市民は社会的脅威を強く感じると市民権制限を受け入れるが、その傾向は政府への信頼が高いほど強くなる。ブルガリアとルーマニアでは民族的寛容の最大の規定要因は、少数派民族の故国についての脅威感だった (McIntosh et al. 1995)。また宗教は、間接的に非寛容を強めるとの知見もある。その理由は、宗教的戒律遵守が脅威感を強める一方、教条的正統主義が人を閉鎖的にするとともに自尊心を弱めるというものである (Eisenstein 2006)。脅威感については以下に見る状況要因の観点からも詳しく研究されている。

脅威感と同様の理由ではあるがより限定的状況において、雇用と希少資源をめぐる多数派と台頭する少数派の間の競争があると、多数派は非寛容になる。Olzak (1992) は米国の都市において、同じ労働市場をめぐる人種間の競争（ニッチ重複）がおきると、支配的集団は新規参入集団を抑圧しようとする、そして職業上の棲み分けが進んでいた都市では人種対立が少なかったことを明らかにした。Kunovich and Hodson (2002) は民族紛争直前のボスニアとクロアチアにおいて、職業的棲み分けと民族的多様性（人口的均衡）が民族的偏見を弱める一方、居住上の民族分離は有意な影響を及ぼさなかったことを示した。またボスニア・ヘルツェゴビナでは各市の公職は民族別人口比により割り振られていたが、同国の民族紛争における各市での（かつての同共和国多数派である）セルビア人による攻撃は、セルビア人の対ムスリム人口比の経時的減少が大きい市ほど激しかった (Slack and Doyon 2001)。

第3節 状況要因

個人のおかれた状況（context）が寛容の度合いに影響を与えることは、特に接触仮説および脅威仮説との関連で議論されるようになった。方法論的には、複数の分析レベルを設定する階層的線型モデル（Hierarchical Linear Model）により、居住地域や国家レベルの変数が個人レベルの寛容に及ぼす効果を検証することが定石となった。

3. 1 国家の制度と政策

憲法体制、社会保障制度、国籍規定などは国家レベルでの寛容を規定する重要な要因である。Peffley and Rohrschneider (2003) は世界価値調査データを用いて、民主主義の安定性と連邦制が寛容を高めることを示した。社会保障制度では、生活扶助制度の無い普遍的制度を用いる国の方が所得再配分が小さいため、移民に対する世論はより寛容であることが Weldon (2006) により論じられている。Crepaz and Damron (2009) は国籍規定の違い（個人主義的/集団主義的、市民的/民族的）が民族的寛容に与える影響に着目し、個人主義的かつ市民的規定を採用する国では最も寛容で、集団主義的かつ民族的な規定の国では最も非寛容であることを見いだした。

3. 2 民族的多様性

民族的多様性が民族的寛容に与える影響は二重の効果を伴うために複合的かつ複雑である⁶。一方で、民族的多様性が高ければ（民族的隔離があまり無いとすると）多数派と少数派の間の接触が高まるはずである。また複数の少数派が存在すると、多数派による非寛容の焦点がぼやけることにもなる（いわゆる多元的非寛容（Gibson 2007））。他方、少数派が多いという事実は、多数派の社会的脅威感を強めることになる。このように、民族的多様性は接触も脅威感も高めることが予想されるため、その寛容への効果は一律でなく、どちらの要因がより強く働くかによって決まると考えられる。両者の要因の比重は、民族的多様性の度合いと集約単位に影響されることが既存研究から読み取れる。

まず民族的多様性の度合いでは、少数派がある程度存在すると（混住状態）、脅威効果が少なく接触効果が大きいために寛容が高まるが、少数派が多すぎると（たとえば国内少数派が地域内多数派になると）、脅威効果が接触効果に勝り、非寛容が高まるというものである（民族的多様性と寛容の間の逆 U 字の関係）。Massey, Hodson, and Sekulic（1999）は旧ユーゴスラビアについて、多数派（セルビア人）は少数派よりも一般的に非寛容であるものの、多数派、少数派ともに、少数派居留地（minority enclave）でより非寛容、混住地域でより寛容であることを示した⁷。ドイツでの外国人に対する反感も、外国人が多数派の地域で最も強く、混住地域で最も弱く、外国人が少ない地域では中程度だった Semyonov and Glikman（2009）。旧ユーゴスラビアにおける各共和国別の寛容度は、共和国内の民族集団人口比率が拮抗しているほど高かったが（Hodson et al. 1994）⁸、これは逆 U 字関係の前半部分（圧倒的多数派状態から混住状態まで）を反映していると思われる。

次に民族的多様性は、生活共同体単位では接触効果、それより上の集約単位（都市など）では脅威効果をより顕著に及ぼす。その大きな理由は、民族的多様性を非寛容につなげる要因である社会的脅威感が、国内レベルの政治的言説に起因していることが多い（Wagner et al. 2006, 387）からである。共同体レベルの分析では Oliver and Wong（2003）が近隣別民族的多様性が外集団への偏見を弱める効果を見いだした⁹。米国の郵便番号区域単位の分析でも（Oliver and Meldelberg 2000）¹⁰、黒人に対する白人の意識は同区域の黒人人口比率に影響を受けていなかった¹¹。ドイツについても、民族的偏見の度合は、民族的少数派の郡（人口は平均 18 万人）単位の比率が高いほど弱いことが報告されている Wagner et al.（2006）。また郡の上の行政単位である県（州を構成するもので、別名は行政管区）単位での外国人人口比率は外国人についての脅威感と寛容に影響を及ぼさないのに対し、個人が認識している国内外国人人口比率は脅威感と非寛容を強める効果をもたしていた（Semyonov et al. 2004）。

より高い集約単位での民族的多様性を扱った分析では、民族的多様性が脅威感と偏見を強める効果がより顕著だった。米国テキサス州のデータを元にした分析（Stein et al. 2000）

では、白人のヒスパニックに対する態度では、ヒスパニックの郡別人口比率が大きいほど否定的だった¹²。また Oliver and Meldelberg(2000)や Oliver and Wong (2003)によれば、大都市単位の民族的多様性が大きいほど¹³、自らと異なる民族集団への偏見は強かった。Dixon(2006)は米国人口国勢調査結果を用いて、白人の黒人に対する偏見が、共同体単位では接触効果（指標は「知り合いである」、「親近感を持っている」）により、都市や郡などのより高い集約単位では、脅威効果（指標は外集団の人口比率）により、それぞれ規定されていることを体系的に示した。

ただし、集約単位が大きくなると脅威効果が高まるという関係には、集団や国による差異が認められる。Dixon (2006)によれば白人のヒスパニックとアジア人への偏見には脅威効果が認められなかったが、彼はその理由を歴史文化的要因に求めた。これは、対象集団への脅威感が強いかに弱いかにより、接触・脅威効果の比重が異なることを示唆している。また国別の外国人比率が高いと、外国人に対する脅威感が強くなるものの、外国人排外識は高くならなかったことからすると（McLaren 2003）、脅威感が偏見・非寛容をもたらす効果を媒介する要因が国別に多様であることが考えられる。

おわりに

本稿の先行研究概観からわかったことは、第1に、寛容を規定する個人的要因は権威主義、教育、接触、脅威についてはその効果がかなり一般的に確認されていることである。第2に、しかしながら、それらが寛容に及ぼす効果を強めるあるいは弱める要因については研究の余地が大きい。特に、権威主義が脅威効果に与える影響、状況要因が接触効果や脅威効果に与える影響は、近年特に注目を集めている。

注

¹ Huckfeldt et al. (2004) は逆の観点から、政治的意見相違が民主主義を支える寛容や討議のための要件であると論じた。彼らは情報共有集団の間でも意見相違が顕在することを示し、社会的適合理論に反論した。

² 「最も」でなくても何らかの度合いで好まない集団をも対象とする試みもあるが (Gibson 1992)、実際の適用は困難であるためほとんど用いられていない。

³ その脅威感とは、（目的や価値の多様性のような）社会的不和と、政治的指導性の欠如の認識からなる。

⁴ 彼の研究の主要な焦点は（否定的）民族的偏見だったが、接触仮説はその後、寛容研究でも幅広く援用された。

⁵ 興味深いことに、交流、信頼、経済状況は、黒人への寛容と同性愛者への寛容を同じように規定していた (Persell, Green, and Gurevich 2001)。

⁶ 多様性に一部関連する概念として、分離 (segregation、民族や宗教などの集団別人口分布の地域別偏り (Alesina and Zhuravskaya 2009) がある。しかし分

離が無いことが必ずしも頻繁な接触を意味するわけではない。民族均質的社会において、分離が無くても（民族別人口分布に偏りが無くても）、民族的多数派が少数派に接触する機会は非常に少ない。

⁷ ただし、彼らは非寛容を「特定の人種、国民、民族への同一性意識の強さ」と定義している点で問題がある。Gibson (2006) や Bahry et al. (2005) によれば、強い同一性意識や集団内信頼が寛容や外集団信頼を弱めるとは限らない。

⁸ 民族集団の人口分布の拮抗度（均等性）は質的変動指標（index of qualitative variation）で測られているため、民族集団の数は勘案されていない。

⁹ この種の分析の潜在的問題の一つは、偏見が居住地域選択に影響を与えるという逆因果関係である。実際、調査対象の人々は、自分と同じ民族集団が多い地区に住みたいとの希望を表明している。しかし、この自己選択の偏りを取り込んだモデルによる分析でも、民族的多様性が偏見を弱める効果は依然として有意だった（Oliver and Wong 2003）。すなわち、居住地域→偏見という因果関係は逆因果関係に打ち消されることはなかった。

¹⁰ 同一郵便番号地域の人口は1万人から4万人程度とされている（Oliver and Meldelberg 2000）。

¹¹ しかし郵便番号地域の教育水準は、個人別教育水準の効果を制御したうえでも、白人の黒人に対する偏見を弱める効果を及ぼしていた。

¹² しかし、この状況要因の負の効果は、接触（「ヒスパニックと会話を交わす」）と状況（ヒスパニック人口規模）の相互作用の正の効果により相殺された。相互作用とは、ヒスパニックと頻繁に会話を交わし、ヒスパニック人口比率の高い郡に住む白人は、ヒスパニックに対して好意的な態度を持つようになるというものである。

¹³ 米国の1990年の大都市（Standard Statistical Metropolitan Area）の人口の平均は696,866だった（米国1990年人口国勢調査結果からの著者による計算）。

文献リスト

- Adorno, T. W. et al. 1950. *The Authoritarian Personality*. New York: Harper & Brothers.
- Alesina, Albert et al. 2003. "Fractionalization." *Journal of Economic Growth* 8: 155-194.
- Alesina, Alberto, and Ekaterina Zhuravskaya 2009. "Segregation and the Quality of Government in a Cross-Section of Countries."
<http://www.economics.harvard.edu/faculty/alesina/files/Segregation%2Band%2Bthe%2Bquality%2Bof%2Bgovernment%2Bin%2Ba%2Bcross-section%2Bof%2Bcountries.pdf>
- Allport, Gordon W. 1954/1988. *The Nature of Prejudice*. Reading, Mass. : Addison-Wesley
- Anderson, Christopher J., and Aida Paskeviciute 2006. "How Ethnic and Linguistic Heterogeneity Influence the Prospects for Civil Society: A Comparative Study of Citizenship Behavior." *The Journal of Politics* 68(4): 783-802.
- Bahry, Donna et al. 2005. "Ethnicity and Trust: Evidence from Russia." *American Political Science Review* 99(04): 521-532.
- Coenders, Marcel, and Peer Scheepers 2003. "The Effect of Education on Nationalism and Ethnic Exclusionism: An International Comparison." *Political Psychology* 24(2): 313-343.
- Cote, Rochelle R., and Bonnie H. Erickson 2009. "Untangling the Roots of Tolerance: How Forms of Social Capital Shape Attitudes toward Ethnic Minorities and Immigrants." *American Behavioral Scientist* 52(12): 1664-1689.
- Crepaz, Markus M. L., and Regan Damron 2009. "Constructing Tolerance: How the Welfare State Shapes Attitudes About Immigrants." *Comparative Political Studies* 42(3): 437-463.
- Davis, Darren W., and Brian D. Silver 2004. "Civil Liberties Vs. Security: Public Opinion in the Context of the Terrorist Attacks on America." *American Journal of Political Science* 48(1): 28-46.
- Deutsch, Morton, and Mary Evans Collins. 1951. *Interracial Housing: A Psychological Evaluation of a Social Experiment*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Dixon, Jeffrey C. 2006. "The Ties That Bind and Those That Don't: Toward Reconciling Group Threat and Contact Theories of Prejudice." *Social Forces* 84(4): 2179-2204.

- Eisenstein, Marie A. 2006. "Rethinking the Relationship between Religion and Political Tolerance in the Us." *Political Behavior* 28(4): 327-348.
- Gibson, James L. 1992. "Alternative Measures of Political Tolerance: Must Tolerance Be "Least-Liked"?" *American Journal of Political Science* 36(2): 560-577.
- Gibson, James L. 2006. "Do Strong Group Identities Fuel Intolerance? Evidence from the South African Case." *Political Psychology* 27(5): 665-705.
- Gibson, James L. 2007. "Political Intolerance in the Context of Democratic Theory." In *The Oxford Handbook of Political Science*. ed. Goodin, Robert E. Oxford: Oxford University Press: 323-341.
- Gibson, James L., and Amanda Gouws 2003. *Overcoming Intolerance in South Africa*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hagendoorn, Louk. 1999. "Introduction: A Model of the Effects of Education on Prejudice and Racism." In *Education and Racism: A Cross National Inventory of Positive Effects of Education on Ethnic Tolerance*, ed. Louk Hagendoorn, and Shervin Nekuee. Aldershot: Ashgate.
- Hinckley, Robert A. 2010. "Personality and Political Tolerance: The Limits of Democratic Learning in Postcommunist Europe." *Comparative Political Studies* 43(2): 188-207.
- Hodson, Randy, Dusko Sekulic, and Garth Massey 1994. "National Tolerance in the Former Yugoslavia." *The American Journal of Sociology* 99(6): 1534-1558.
- Huckfeldt, Paul, Paul E. Johnson, and John Sprague 2004. *Political Disagreement: The Survival of Diverse Opinions within Communication Networks*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddy, Leonie et al. 2005. "Threat, Anxiety, and Support of Antiterrorism Policies." *American Journal of Political Science* 49(3): 593-608.
- Kunovich, Robert M., and Randy Hodson 2002. "Ethnic Diversity, Segregation and Inequality: A Structural Model of Ethnic Prejudice in Bosnia and Croatia." *The Sociological Quarterly* 43(2): 185-212.
- Lavine, Howard, Lodge Milton, and Kate Freitas 2005. "Threat, Authoritarianism, and Selective Exposure to Information." *Political Psychology* 26(2): 219-244.
- Marcus, George E. et al. 1995. *With Malice toward Some*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Marcus, George E. et al. 2005. "The Emotional Foundation of Political Cognition: The Impact of Extrinsic Anxiety on the Formation of Political Tolerance Judgments." *Political Psychology* 26(6): 949-963.

- Marquart-Pyatt, Sandra, and Pamela Paxton 2007. "In Principle and in Practice: Learning Political Tolerance in Eastern and Western Europe." *Political Behavior* 29(1): 89-113.
- Massey, Garth, Randy Hodson, and Dusko Sekulic 1999. "Ethnic Enclaves and Intolerance: The Case of Yugoslavia." *Social Forces* 78(2): 669-693.
- McIntosh, Mary E. et al. 1995. "Minority Rights and Majority Rule: Ethnic Tolerance in Romania and Bulgaria." *Social Forces* 73(3): 939-967.
- McLaren, Lauren M. 2003. "Anti-Immigrant Prejudice in Europe: Contact, Threat Perception, and Preferences for the Exclusion of Migrants." *Social Forces* 81(3): 909-936.
- Mutz, Diana C. 2002. "Cross-Cutting Social Networks: Testing Democratic Theory in Practice." *American Political Science Review* 96(01): 111-126.
- Oliver, J. Eric, and Tali Mendelberg 2000. "Reconsidering the Environmental Determinants of White Racial Attitudes." *American Journal of Political Science* 44(3): 574-589.
- Oliver, J. Eric, and Janelle Wong 2003. "Intergroup Prejudice in Multiethnic Settings." *American Journal of Political Science* 47(4): 567-582.
- Olzak, Susan 1992. *The Dynamics of Ethnic Competition and Conflict*. Stanford, California: Stanford University Press.
- Peffley, Mark, and Robert Rohrschneider 2003. "Democratization and Political Tolerance in Seventeen Countries: A Multi-Level Model of Democratic Learning." *Political Research Quarterly* 56(3): 243-257.
- Persell, Caroline Hodges, Adam Green, and Liena Gurevich 2001. "Civil Society, Economic Distress, and Social Tolerance." *Sociological Forum* 16(2): 203-230.
- Pettigrew, Thomas F., and Linda R. Tropp 2006. "A Meta-Analytic Test of Intergroup Contact Theory." *Journal of Personality and Social Psychology* 90(5): 751-783.
- Semyonov, Moshe, and Anya Glikman 2009. "Ethnic Residential Segregation, Social Contacts, and Anti-Minority Attitudes in European Societies." *European Sociological Review* 25(6): 693-708.
- Semyonov, Moshe et al. 2004. "Population Size, Perceived Threat, and Exclusion: A Multiple-Indicators Analysis of Attitudes toward Foreigners in Germany." *Social Science Research* 33(4): 681-701.
- Slack, J. Andrew, and Roy R. Doyon 2001. "Population Dynamics and Susceptibility for Ethnic Conflict: The Case of Bosnia and Herzegovina." *Journal of Peace Research* 38(2): 139-161.

- Stein, Robert M., Stephanie Shirley Post, and L. Rinden Allison 2000. "Reconciling Context and Contact Effects on Racial Attitudes." *Political Research Quarterly* 53(2): 285-303.
- Stenner, Karen 2005. *The Authoritarian Dynamic*. Princeton: Princeton University Press.
- Stouffer, Samuel A 1955. *Communism, Conformity, and Civil Liberties: A Cross-Section of the Nation Speaks Its Mind*. Garden City, New York: Doubleday.
- Uslaner, Eric 2002. *The Moral Foundations of Trust*. New York: Cambridge University Press.
- Wagner, Ulrich et al. 2006. "Prejudice and Minority Proportion: Contact Instead of Threat Effects." *Social Psychology Quarterly* 69(4): 380-390.
- Weldon, Steven A. 2006. "The Institutional Context of Tolerance for Ethnic Minorities: A Comparative, Multilevel Analysis of Western Europe." *American Journal of Political Science* 50(2): 331-349.
- Wilner, Daniel M., Rosabelle Price Walkley, and Stuart W. Cook 1955. *Human Relations in Interracial Housing: A Study of the Contact Hypothesis*. New York: Russell & Russell.